

◆ センター長挨拶 ◆

アメリカでの一年間の在外研究から帰国し、8月1日より、一神教学際研究センターのセンター長となりました。本センターは2003年に設立され、森 孝一センター長が7年にわたりその基礎を築かれ、その後、富田健次センター長を経て、私へとバトンタッチされました。まだ「若い」センターですが、はつらつとした雰囲気や挑戦的な気概を失うことなく、少しずつ成熟した研究機関へと成長していくことができればと願っています。

私の元来の専門は、キリスト教神学です。プロテスタント神学を中心としながら、キリスト教思想を研究の対象としてきました。キリスト教神学の伝統的な分類法では「組織神学」(Systematic Theology)と呼ばれる分野です。そのような背景をもった私が「一神教」を学問の対象として意識し始めたのは、ドイツに留学していたときでした。このあたりの事情については、近刊拙著『宗教のポリティクス——日本社会と一神教世界の邂逅』(晃洋書房)の「あとがき」にも記しましたが、もう20年以上も前のことになります。

私は旧・西ドイツで留学生生活を開始し、ベルリンの壁崩壊(1989年)を目の当たりにし、東西ドイツの統一(1990年)に立ち会うことができました。冷戦時代が終わりを告げようとしていた、まさに歴史の激動期ですが、個人的にも、学問の枠組みを揺さぶられる経験をしました。もともと宗教間対話に関心をもっていたとはいえ、ドイツではじめてイスラームやユダヤ教のリアリティに接することになったのです。

その当時、ドイツはすでに多数のトルコ系移民を抱えていました。大学でもトルコ人の友人ができ、彼ら・彼女たちと話しているうちに、イスラームへの関心が大きくなっていきました。幸い、イスラームやクルアーン(コーラン)を学ぶ授業が新設さればかりの頃で、キリスト教神学を学ぶかわら、それらの授業に参加しました。

また、戦後のドイツ神学においては、ホロコーストへの反省から、ユダヤ教との対話が重い課題として存在していました。そういう状況の中で、私自身もユダヤ教とキリスト教の係に強い関心を寄せ続けることになりました。

こうした事情から、一神教的テーマは私の関心の奥底にずっと横たわっていたのですが、それらを本格的に自分の学問対象として考えるようになったのは、本センターの設立が大きく影響しています。本センターの設立をきっかけに、もはや逃れることのできない課題として、一神教研究を受けとめる覚悟を決めることになりました。

とはいえ、一神教の学際的な研究がかかえる課題はあまりにも大きく複雑です。センター長としての重責に、早くも、あえぎながら走っているような感すらあります。自己紹介の写真には通常、落ち着き払ったポートレート写真を載せるべきなのかもしれませんが、右上には、あえて息も絶え絶え走っている写真を載せました。これは帰国の一週間前に走ったサンフランシスコ・マラソンの写真です。

センター長として完走できる日がいつ来るのかわかりませんが、みなさまからのご支援を心よりお願いする次第です。



◆ 公開講演会・研究会報告 ◆

日本オリエント学会共催 公開講演会

おんぶんか

「イスラーム世界の音文化としての

コーラン（クルアーン）－言語人類学的考察」

日 時：2010年2月27日（土） 13:00～15:00
 会 場：同志社大学 クラーク記念館2階 礼拝堂
 講 師：西尾 哲夫（国立民族学博物館 教授）



アラブをはじめとしたイスラーム世界は、世界的にみても豊穡な音楽文化を持つ。一例として、日本でも人気が高いベリーダンスは、観光資源としての重要性から、エジプトで「第四のピラミッド」と呼ばれる程である。しかし同時にイスラームの宗教的価値観では、音楽や楽曲は忌避される存在である（その極端な例はアフガニスタンの旧タリバン政権。また、ベリーダンサーの社会的地位も決して高くない）。なぜ音楽は忌避されるのか。講師の西尾哲夫先生は、この問いにイスラーム世界とコーランにおける「音（おん）文化」の分析を通じて接近された。

「音」（おん）とは、人間の世界を取り巻く様々な「おと」を、人間の言語を含めて包括的に示す概念であり、これらを人間がどのようにコミュニケーションに役立てているのかを分析するのが、「音文化」研究である。

「音文化」的な理解にとって、イスラームの聖典『コーラン』（クルアーン）の重要な特徴はふたつある。一つはコーランが本来は声に出して読まれ（読誦[どくしょう]）、伝えられる（口承）ものであることである（「クルアーン」の元となった言葉は、古代アラビア語で「声に上げる」、ヘブライ語で「叫ぶ」。語源はシリア語と考えられる）。読み方の規則として「タジュウィード」があるが、特に旋律をつけた読み方はティラーワと呼ばれ、七つの流派に分かれる。また読み人の個性によっても、抑揚と旋律をつけた、すぐれて「音楽的」なものとなる。イスラームの法学上は、旋律付きの読誦は禁止されているが、韻を踏んで、抑揚と旋律をつけた文体で朗唱されるコーランは、我々の耳にとっても「音楽的」に聞こえる（音楽そのものではないが）。コーランの朗唱以外でも、例えば、モスクが礼拝の時間を知らせるアザーン（信仰告白の朗唱）も、とても「音楽的」である。

もう一つの重要な特徴は、イスラームが、アラビア語以外の言語への「コーラン」の翻訳を認めず（訳されたものは「注釈書」とされる）、またウラマー（イスラーム法の専門家）以外の人々によるコーランの自由な解釈を禁じている点である。なお、7世紀の半ばに、第三代カリフのウスマーンによって、コーランのテキストが統一された（ウスマーン版）。イスラームの広がりによって、コーランのテキストに地域差が見られるようになったためである。この結果、読誦と口承を基本とするコーランだが、7世紀半ばには、すでに「文字」を獲得していた（その後も、長らく文字のコーランは、口承を補うためのいわば備忘録だった）。

以上の二つの特徴から言えることは何であろうか。まず、音楽を忌避する「建前」とは別に、「音楽」（とくに歌）の長をコーランがうまく利用していることである。歌は共同体内部の仲間意識・一体感を高揚させ（グルーミング機能）、また共同体に真実として伝わる伝承・伝説を共有するのに極めて有効に作用するが、コーランはこの機能を受け継いでいる。しかし同時に、歌謡曲の歌詞や小説とは違って、宗教テキストとして、自由な解釈は好ましくない。このため「コーラン」をアラビア語に限定することで意味の拡散を防ぎ、またウラマー以外の解釈を禁じているのである（イジュティハドの門は閉じられた）。

イスラームが「世界宗教」としてウンマ（イスラーム共同体）を形成して行く過程では、民族や地域など特定の集団を越えていく必要があった。このために、コーランは「音楽」の利用を禁じながら、実際にはその機能をブラクティカルに

うまく利用してきた。しかし、そうだからこそ、「音楽」が持つ力の怖さをよく分かって、音楽を忌避しているのではないか。イスラーム法学者の説明は全く異なる理論だろうと断った上で、西尾先生は以上のように結論された。また、コーランの解釈を行うウラマーが常に誠実なのかどうか、さらに、普遍的な力を持った音楽が同時に持つ「排他性」（歌わない人を排除する＝世界をつなぐと同時に、閉じる）の特徴が、現在問題として現れているのではないか。あらゆる宗教テキストに共通の特徴とした上で、以上の問題を提起された。

講演中に西尾先生はコーランの朗唱やアザーンの音声、さらに若者の信仰心を喚起するためにマレーシア政府が人気歌手を使って製作した楽曲を流され、まさに音にあふれた講演会となった。

CISMOR特別研究員 中谷 直司

第2プロジェクト 公開講演会

「トルコにおける宗教間の共生—その課題と展望」

ドキュメンタリー・フィルム上映

「一神教の故郷、トルコの今をみつめて」

日 時：2010年3月6日（土） 14:00～16:00
会 場：同志社大学 弘風館2階 K25教室
講 師：内藤 正典（一橋大学大学院 教授）



本講演は、いつもと違い、ドキュメンタリー・フィルムの上演が中心であった。このドキュメンタリーは、内藤正典先生と一橋大学の学生たちが、2008年12月にトルコでおこなったインタビューを元に作成されている。今日のトルコにおける世俗主義の在り方について、宗教指導者やジャーナリスト、一般の人々に意見を聞く、というのが、その主たる内容である。そうしたインタビューを通して、トルコにおける宗教間の共生の現状を紹介し、その明暗を浮かび上げようとしたものである。

古代、文明の十字路と言われたトルコは、今日では国民の9割以上がムスリムであり、オスマン帝国以来のムスリム国家としてのアイデンティティをもっている。しかしながら、トルコは同時に、「キリスト」という語や使徒パウロが誕生した地でもあり、長くユダヤ教徒やキリスト教徒が生活してきた土地でもあった。そうした背景をもつトルコにあって、ムスタファ・ケマル（トルコ共和国初代大統領）以来の「世俗主義」の原則は、現在のトルコにおける宗教間の共生を可能にしている要因の一つとして挙げられる。

アンタキアにあるカトリック教会の神父によれば、当地のカトリック信者とムスリムは昔から互いの宗教を尊重し合い、隣人として自然に暮らしてきた。事実、カトリックの教会ではイスラームの犠牲祭を祝い、逆に、復活祭のミサに参加するムスリムもいる。また、イスタンブールの主席ラビによれば、トルコのユダヤ教徒集団は、オスマン帝国の衰退に伴って弱体化したが、それにもかかわらず世俗主義があることによって、信仰の自由を保障されてきた。同様に、アルメニア正教会の聖職者も、トルコでは、自分たちの教会や学校、新聞を持つことができ、信仰集団として存続しやすくなっている、と述べる。

しかし、世俗主義がはらむ矛盾を指摘する声も挙がる。コンスタンティノープル総主教によれば、トルコがギリシアと外交上の緊張関係に入ったことに端を発し、トルコ国内において正教会の神学者を養成することが禁止されている、という事実について説明した。それは、世俗主義が保証する信仰の自由を妨げるものではないか、と総司教は問いかける。また、今日のトルコが、AKPのもとでスンナ派中心主義になっている、という点にも手厳しい声が挙がる。例えば、政府の予算がモスクの管理に割り当てられている点、あるいはスンナ派の聖職者にだけ政府から給与が支払われている点、などである。そうしたことが、ムスリム以外の立場から、あるいはスンナ派以外の宗派から批判されているのである。後者に該当するアレヴィー派の指導者は、それを「世俗主義の空洞化」と表現し、政府に対してそのような差別の撤廃を求めて

いる。一般の人々も、トルコが世俗主義を採用しているにもかかわらず、国民のIDカードに宗教欄があることについて矛盾を感じているようである。

ふつうトルコ国内では、トルコの世俗主義を賞賛する声が多い。しかし、このドキュメンタリー・フィルムでは、上述したような今日の課題が人々の声を通して浮かび上がっており、宗教間の共生を考える上で興味深いものとなっている。

CISMORリサーチアシスタント 高尾 賢一郎

第1プロジェクト 公開講演会

「7世紀のイスラーム到来期における コプト教会の動向—現代の視点より」

日 時 : 2010年3月13日 (土) 13:30~15:30
会 場 : 同志社大学 神学館3階 礼拝堂
講 師 : 村山 盛忠 (日本キリスト教団 牧師)

講演者である村山盛忠氏は1964-68年までの間、日本基督教団よりエジプトへ派遣され、同地のコプト福音教会で宣教師として奉職していた。講演では主として、イスラーム到来期以前のエジプトのコプト教会を取り巻く状況が述べられた。

よく知られているように、キリスト教は313年に皇帝勅令によりローマ帝国において公認された。ただし、その勅令はキリスト教を公認する



と同時に、ローマ皇帝（東ローマ帝国）にとっては、帝国領内のキリスト教会の統一が重要な政治課題となった。451年に行なわれたカルケドン公会議は、教義を議論する場ではなく、予め提出されていた事項を皇帝が承認、採択する形式に乗っ取ったものであった。そこでは、皇帝および首都コンスタンティノポリス総主教がイニシアティブを執り、エジプトを代表したアレクサンドリア総主教ディアスコロスは異端との判断を下されるなど、教義の問題に親皇帝派か反皇帝派かといった政治的立場が色濃く反映される結果となった。この結果エジプトの教会には、皇帝の承認する総主教（後のギリシャ正教会）と、エジプト民衆が選出する総主教（コプト教会）の、二人の総主教が出現することになった。イスラーム到来期までの間、反皇帝派／反カルケドン派となってしまったエジプトのコプト教会は、ローマのキリスト教世界の中で守勢、劣勢に立たされることになった。

とはいえ、皇帝派と反皇帝派の争いはその後も続き、マウリキウス皇帝時代や、コンスタンティノポリスでクーデタを起こした次のフォカス皇帝時代に至るまで以前としてローマ内の政治状況は不安定であった。エジプトのコプト教会はその状況の中で何とかアレクサンドリアの主教座を護ってきたが、619-629年の間はサーサーン朝ペルシアの統治下に入り、その間コプト教会は保護され、自由な生活を享受することができた。ただしその後はローマのヘラクリオス皇帝がサーサーン朝を撤退させ、エジプトがローマに戻ってからコプト教会はディオクレティアヌス皇帝時代以来と言われる凄惨な迫害を受けることになる。ローマ皇帝の権力を背景にした皇帝派総主教は、軍事、財政、行政等の広範にわたるエジプト全土を支配する総督と同等の地位を与えられ、コプト住民を迫害した。当時のコプト総主教ベンジャミンは、10年間砂漠に逃避せざるを得なかった。これこそがイスラーム到来期以前のコプト教会の状況であった。

その後、コプト教会はエジプトにおいてイスラーム教徒との長い共存を果たしてきたわけだが、それは彼らが今日叫ばれるような宗教間の「対話」以前の状態にあることを意味している。コメンテータの津田一夫氏（大阪九條教会牧師）は、シリアのキリスト教会を訪問した際に同様の印象を同地の教会を取り巻く環境に覚えた経験を述べ、聖書世界あるいはその後の初期キリスト教会が、国政や統治者の変化に左右されない連綿と続くアイデンティティの下に集まり、それが今日のシリア、エジプトに見られるのだとコメントした。

CISMORリサーチアシスタント 高尾 賢一郎

第2プロジェクト 公開講演会

「グローバル化とアメリカの覇権—そして、日米関係のゆくえ」

日 時 : 2010年5月8日(土) 13:00~15:00
会 場 : 同志社大学 臨光館2階 R201教室
講 師 : 五十嵐 武士 (桜美林大学 教授)



近現代史のなかで、日本はアメリカによって三度ほど国家的な危機に直面させられている。氏は、その事実を確認することから講演を始めた。一度目は、ペリーの来航によって開国を余儀なくされ、その後は国民国家の形成という課題を負わされた。二度目は、第二次世界大戦の敗戦によって占領され、その後は民主主義の確立を迫られて、まもなく冷戦に組み込まれていった。三度目は、グローバル化によって市場開放を求められ、現在の世界経済危機に巻き込まれることになった。なぜ日本はこれまで、アメリカの影響を大きく受けてきたのか、あるいは、なぜアメリカは大きな影響力をもつことができたのだろうか。この点で現在重要なのが、「グローバル化」である。

グローバル化とは、ヒト・モノ・カネ・情報などが、国境を越えて大量かつ迅速に動くようになる事態をさす。従来も帝国主義による領土的な拡大があったが、それと現在のグローバル化は同じものではない。異なるのは、個人や企業も中心になって活動する、という点である。移民で構成されている国は、元来そういう性格をもっているが、現在それを世界に広める役割をしているのがアメリカにほかならない。それはなぜか。

ヒトの面では、もともと移民国家であるうえに、1965年に移民制限を緩和したことによってアジアや中南米からも移民が大量に押し寄せ、さらに多様性が増している。モノの面では、そもそも貿易によって発展した国であり、特に19世紀末からはヨーロッパにたいしても優位に立った。カネの側面でも、第一次世界大戦後は債権国になり、それ以降ニューヨークのウォール街が、ロンドンのシティと肩を並べて国際金融の中心地になっている。

情報の面では、1990年代のIT革命によって情報のグローバル化を急速に加速した。アメリカは、本来文明の中心という古典的な「帝国」の性格をもっており、大衆文化や消費文化といった現代文明のライフスタイルを創出して、国際的に発信してきた。アメリカの国際的な主導権が、そうしたソフトパワーにも由来している点は特に注意を要する。

実際に、第二次世界大戦後、アメリカは政治的に国際連合を組織し、経済的にはブレトンウッズ体制をつくるのに主導権を発揮した。次いで冷戦時代には、西側陣営内のなかで、民主主義を安定化させ経済発展も実現して相互依存をもたらし、冷戦が終結してからは、その影響が東側にも広がってグローバル化を振興したのである。

しかしながら、80年代からは国際競争が激化し、世界経済におけるアメリカの優位も動揺し始めた。また、アメリカのライフスタイルに反発するイスラーム世界からは、過激派が生まれ、テロに悩まされるようになった。21世紀に入ってから、イラク戦争や世界金融恐慌など、混乱の度合いが加速している。それらの混乱を受けて誕生したオバマ政権は、レーガン政権以来の方針を転換して、軍事力や経済力よりも、核問題や地球温暖化といったグローバル・イシューにおいて主導権を発揮しようとしている。

こうした冷戦終結以降の変化を受けて、日米安保も再検討する必要が出てきている。しかも、その場合には、中国が大きく台頭して、アジアの勢力図が大きく変わりつつある情勢も併せて考えなければならない。氏は、鳩山前首相が言った「東アジア共同体」は構想として悪くなく、普天間問題など目の前の問題はあるにしろ、二、三十年先の日米関係の課題として目標に据えて準備していかなければならない、と述べて講演を終えた。

CISMOR特別研究員 藤本 龍児

CISMOR若手研究会 シンポジウム

「マルティン・ブーバーの思想とその聖書解釈の可能性

—ドイツとユダヤの間で—」

第一部：公開講演会「マルティン・ブーバーの聖書解釈」

日 時：2010年5月15日（土）13:00～14:15

会 場：同志社大学 神学館3階 礼拝堂

講 師：木田 献一（山梨英和大学 前学長）



木田氏の講演は、マルティン・ブーバーの聖書解釈、特にその古代イスラエルのテオクラティー(神政政治)論についてのものであった。木田氏によると、ブーバーはその生涯において、四冊の聖書解釈書を著している。『神の王国』、『預言者の信仰』、『モーセ』、『油注がれたもの』がそれであり、いずれも邦訳されている。なお木田氏はこれら四冊の聖書解釈書に比べ、CISMORの研究テーマ(文明の共存と安全保障)との関連で重要な著作として、『ひとつの土地にふたつの民』のことも紹介された。木田氏はこれらの著書のうち、主に『神の王国』を参照しつつ、ブーバーによる古代イスラエルのテオクラティー論を紹介していった。

この本でブーバーはまず、「士師記」のギデオンの言葉——「わたしは、あなたたちを治めない。息子もあなたたちを治めない。主があなたたちを治められる」(士師記8:22)——を手がかりにして、初期イスラエルにおけるテオクラティーの考え方を明らかにしている。「士師記」によれば、ギデオンは神の霊を受けて士師となり、敵を撃退する。これに感謝した人々は、ギデオンに王になるように依頼するが、ギデオンはこの依頼を断り、本来の仕事である農民に戻ると告げる。上のギデオンの言葉は、人々の依頼を断る際にギデオンが述べたものである。この言葉からうかがえるのは、王は本人の意志や世襲によってなるものではなく、神に選ばれ、その霊を受けたものになるべきものだという、古代イスラエル民族の思想である。

次にブーバーは、古代イスラエルにおけるこうした王の概念と対比させつつ、古代オリエントの主要三文明(エジプト、バビロン、南アラビア)のイデオロギー的色彩の強い「神王」にかなする神話を検討している。これらの文明は大きな河川の周辺に広がっており、肥沃な土地がある。支配階級は、武力で土地を支配し、農奴を働かせ、権力と富を蓄積していった。そこで形成されるのは、多数の農奴と、そこから完全に区別された支配階級から成り立った社会である。そして、こうした王権に神学的権威を付与するのが、古代オリエント文明における「神王」概念であった。ちなみにブーバー自身は言及していないものの、木田氏によればシュメール神話における「神の子」概念についても、同様のことが指摘できるという。

ブーバーは、これら古代オリエントの主要三文明の「神王」概念が、古代イスラエルのテオクラティーの考え方と対照的であることを指摘する。古代イスラエルは、肥沃な土地を背景にもたない、農民や牧羊者を中心として成り立った社会であり、農奴と支配階級のあいだの断絶が存在しない。こうした背景のゆえに、イスラエルのテオクラティーは、支配階級を正当化するものではなく、むしろ貧しい民を中心とし、彼らを守り助けるためのものとなった。古代イスラエルにおいては、神が真の王として民族の先頭に立ち、彼らを救う。そして、そのような神に服従し、民を守り、救うのが古代イスラエルにおけるメレク(王)であった。すなわち自らを犠牲にして、民のために身を挺して戦うというのが、古代イスラエルのテオクラティーにおけるメレク(王)の基本線である。「出エジプト記」のモーセや「イザヤ書」の苦難のしもべも、この基本線上に位置づけられる。

また木田氏によれば、紀元前2-1世紀になると、自分を犠牲にして民を救う王のイメージが、より強くなっていった。そのイメージは、キリスト教のメシアであるイエスにも重なるものである。ブーバーが捉えたイスラエルのテオクラティーの考え方は、ユダヤ教のメシア像がキリスト教のメシア像につながっていく過程をも示唆するという意味でも、重要なものであるという。

CISMORリサーチアシスタント 杉田 俊介

第二部：研究会「聖書学と法学の観点から」**日時：2010年5月15日（土） 14:45～16:15****会場：同志社大学 寧静館5階 会議室****発表：「聖書学におけるブーバー」**

津田一夫（同志社大学大学院）

「マルティン・ブーバーのTheokratie理解の特徴」

平岡 光太郎（同志社大学大学院）

コメント：北 博（東北学院大学 教授）**濱 真一郎（同志社大学 教授）****「聖書学におけるブーバー」**

聖書本文に繰り返し現れるヘブライ語の単語やその語根を鍵語（Leitwort）として、その語られる形（Style）に注目して物語の意味を読み解こうとするブーバーの聖書解釈は、聖書の文芸学的釈義（Literary Exegesis）の古典的な例として紹介されることが多い。

一方、文献の成立史という歴史的問題に関心を寄せた19世紀（特にWellhausen）以来の近代聖書学の主流の中では、例えばブーバーと同様に物語の様式や類型に注目しつつも生の座という社会的関心によって歴史的研究においても存在感をもったH.Gunkelやその門下生と比較すると、ブーバーは限定的な存在に見える。

ブーバーの解釈はあくまで聖書全体を一つの作品として見る共時的解釈であり、通時的解釈とは方法論的に区別されたと考えられたからであろう。しかしながら、士師記を扱った著作『神の王国』に目を移すと、彼は共時的解釈のみならず、歴史的問題にも大胆に言及していることが分かる。

これは方法論的にまったくの逸脱というわけではないと、本発表では主張された。ブーバーは、Leitwortstyleの背後にその形を生み出すに至った歴史的共同体の記憶が存在していると考えていたのである。『神の王国』の中で、それは神政治の記憶であった。ブーバーの記憶論の背景には聖書学以外の学問領域の蓄積があると思われる。例えば、仏の言語心理学者M.ジュセ(1925)。あるいは同時期、仏で活動していた社会学者M.アルヴァックス(1925)の記憶論への参照も有益であろう。伝承論との関連ではJ.グリムなどもいる。様式史的研究の生の座と記憶との類似点および相違点にも留意すべきである。それらを考慮しつつ、また実際の聖書にも即しつつ、記憶という観点からブーバーの聖書解釈の方法論的意義を、その有効性と限界両面から、捉えなおす試みが行われる。

同志社大学大学院 津田 一夫

「マルティン・ブーバーのTheokratie理解の特徴」

近代の世俗化の中で、西洋の文明圏にいた多くのユダヤ人は、ヘブライ語聖書（旧約聖書）の非聖典化、つまり聖典の古典化の過程を経ました。特にイスラエルでは、ヘブライ語聖書は国民の正当な古典として理解され、国会議員による聖書勉強会でヘブライ語聖書のリーダー像などが学ばれた状況が近年にありました。

現代ユダヤ思想において、宗教と政治の問題を考える際、ヘブライ語聖書にどのような政治モデルを見出すかは、単に聖書解釈の領域に留まりません。つまり、その政治モデルは、人々の政治思想理解に影響を与え、ひいては中東の安全保障にも関わってくる可能性があります。

マルティン・ブーバー（1878－1965）は、*Königtum Gottes*（1932）において、聖書注解を行いつつ、宗教と政治の問題を考えるうえで重要な視座を神権政治概念によって提示した人物で、彼はまた「バイ・ナショナリズム（二民族共存国家論）」の提唱をして、アラブ人・パレスティナ人との共存を目指しました。

ブーバーが*Königtum Gottes*を第三版まで出版する過程で、数々の著名な聖書学者たちと、神権政治理解をめぐって意見交換を行いましたが、現代聖書学では、彼の主張は取り上げられることがきわめて少ない状況です。これに対しユダヤ思想の領域では、彼の神権政治理解は取り上げられ続けています。本発表では、ブーバーの神権政治理解の主要な点と現代ユダヤ思想におけるその受容を明らかにすることを目的としました。

同志社大学大学院 平岡 光太郎

第三部：研究会「哲学とユダヤ学の観点から
—聖書解釈に見るブーバーの思想—」
日 時：2010年5月15日（土） 16:30～18:00
会 場：同志社大学 寧静館5階 会議室
発 表：「聖書における神の直接統治の思想的意義
—ブーバーの士師記解釈より—」
堀川 敏寛（京都大学 非常勤講師）
「マルティン・ブーバーの聖書解釈における
声の形態学—JudaistikとGermanistikの交叉—」
小野 文生（京都大学 特定助教）
コメント：合田 正人（明治大学 教授）



「聖書における神の直接統治の思想的意義—ブーバーの士師記解釈より—」

本発表では、宗教哲学者マルティン・ブーバーが、ヘブライ語聖書「士師記」解釈を通して表明した「神の直接統治」と「ユートピア社会」思想について報告された。

士師記における政治形態は、「緩やかにつながっている12部族の連合社会」であったことは、ドイツの聖書学者M・ノートの「アンフィクティオニー仮説」を通して語られていたが、それは聖所を守る宗教的な連合帯であった。ブーバーはその連合帯を政治／経済的に結びつけたものとする。

まず政治的には、人間の王による国家の形態をとる統治ではなく、その都度期間限定で選出された指導者を通じたカリスマ統治が目指された。つまり「神の直接統治」とは、具体的にこのような政体を通して成立するのである。

次に経済的には、農業を主軸として、工業及び手工業との有機的連合の中で、生産と消費とが結合した共同生活が考えられる。これは国家のような上から統治する機能が縮小され、職種同士が連合し合う多元的経済システムである。これらはいずれも「士師記」という前王国期を特徴づける重要な視座である。

更にブーバーは、この士師記における「神の直接統治」解釈から、自身のユートピア社会論を展開している。彼は20世紀初頭スイスやドイツで隆盛した宗教社会主義思想に影響を受け、必要最低限のライフスタイルを営む縮小経済、消費と生産が合致する完全協同組合の実現を提案した。これはブーバーがシオニズム運動の中で、パレスティナにて実現を考案した思想でもある。

この協同組合や職業連合を軸とした社会こそが、ブーバーがイスラエルにおいて望んだユートピアであり、それが聖書解釈に根差していたことが、本発表で報告された。

京都大学 非常勤講師 堀川 敏寛

「マルティン・ブーバーの聖書解釈における声の形態学—JudaistikとGermanistikの交叉—」

本発表は、M・ブーバー『神の王権』というテキストを聖書学の文脈においてテキスト内在的に分析すると同時に、間テクスト的により広い思想的土壌から照射することで、彼の聖書解釈のユニークな側面とその意義を明らかにすることを目的とする。ブーバーはこの作品のなかで、「歴史」を「できごと」へと送りかえすこと、そして過去の歴史的な「できごと」の生成過程に「ことば」を媒介にして立ち会うすべを見出そうと試みている。歴史の起源に〈声〉を見出し、〈声〉の発生と伝承の「形態」を問題にしようとするブーバーを、本発表は〈声〉という「かたちなきもののかたち」を思考した哲学者と理解する。このようなブーバーの思考は、彼の聖書翻訳論にも見出せるものである。彼はテキスト読解から立ち現れる「形態（ゲシュタルト）」を聖書理解の中心に据え、それを翻訳の原理に据える。このブーバーのユニークな思考を生成させた土壌として、いくつかの同時代思潮に対するブーバーのコミットメントの痕跡を明らかにしてみる。たとえば、サヴィニー＝グリムの歴史法学と民俗学、「形態」を問うゲシュタルト心理学、「様式」概念から芸術を歴史的に再構成する芸術史ウィーン学派、ヴァールブルク、エルヴィン・パノフスキー、カッシーラーなどイコノロジーや象徴の「形式」を問う思想などである。「ドイツとユダヤのあいだ」を生き抜いたひとりのドイツ＝ユダヤ人の生の格闘が、聖書という書物の解釈とどのように共鳴しえたのか、そしていかなる思想をつくりあげたのか——こうしたことがらが問われるだろう。

京都大学 特定助教 小野 文生

第1プロジェクト 研究会

「イスラームにおける理性（'aql）と伝承（naql）

—スンニー派とシーア派—

日 時：2010年6月5日（土） 14:00～17:20

会 場：同志社大学 至誠館3階 会議室

講 師：鎌田 繁（東京大学 教授）



啓示宗教としてのイスラームは、人智では判断できない超越的な神のメッセージ（とされるもの）によって成り立っている。しかし同時に人間は、この神の啓示を自ら理解して、様々な行動と思想を組み立てていく必要がある。さらにイスラームもアラビア半島を出て広く拡大していく過程で、多様な地域社会の問題に対処する必要があった。この過程で、①人間の「理性」（'aql、アクル）の発揮を比較的自由に認めるものと、②それをなるべく避

け、神の言葉であるクルアーンと預言者ムハンマドの言行・判断の記録であるハディースからなる「伝承」（naql、ナクル）を重視するものという、2つの思想的傾向が現れた（シーア派の多数派である十二イマーム派の場合は、ムハンマド後の12人のイマームの言行・判断も権威あるナクルとなる）。

各地域で発達した理性知と伝承知を組み合わせ、イスラーム法解釈の体系を作り上げたのはシャーフイー（840年没）である。彼はイスラーム法の法源をクルアーン、スンナ（ハディースに基づく預言者の言行）、イジュマー（ムスリム全体の学者の同意）、そしてキヤース（先例からの類推）の4つに分類した。「理性」の発揮にあたるのがキヤースである。しかし、現在は消滅しているが、出来るだけ人間の理性的判断を避けようとするザーヒル学派がかつて存在した。現存するスンニー派の4法学派の1つであるハンバル派も、同様の傾向を持っている（あとの3つはマーリク、ハナフィー、シャーフイー）。

シーア派の法学にとって（場合によっては神学にも）重要なのはウスूल派とアフバール派である。現在イランで主流を占めるウスूल派は人間の理性的判断を非常に重視する。他方、現在力を失っているアフバール派は伝承知を非常に重視し、ハディースの信憑性を論ずることは理性の行使であるとして避けるため、結果的に、それを自由に使用する。以上のように、スンニー派でもシーア派でも、理性知を比較的重視するものと、その使用をできるだけ避けようとするものと、2つの傾向が法学の中に存在している。

神学にとって重要なのは、理性的な議論を非常に重視したムウタジラ派である（全盛期はアッバース朝の初期）。結局スンニー派ではその主張は否定されたが、〈論理的に議論を進める〉という方式は、伝承知を重視するスンニー派の神学の中にも残った。他方、シーア派の正統神学には、ムウタジラ派の議論がほぼそのまま流れ込んでいる。加えてユダヤ教の神学は、ムウタジラ派の影響によって形成された。

古代ギリシャ哲学を継承し、また理性的判断を極端に推し進める行為である哲学（このため哲学者はしばしば不信仰者と非難を受けた）についてはどうか。まずスンニー派では、アリストテレスの注釈書を多数執筆し、ヘブライ・ラテン両言語への翻訳を通じて結果的にスコラ哲学を生み出すイブン・ルシュド（1198年没）が、自らの哲学を正当化するためにクルアーンの章句を引いたこと以外は、伝承知と理性知の関わり合いはあまり見られない。他方、シーア派の文脈においては、両者の結びつきはより強く、それが顕著に見られるのがモッラー・サドラー（1640年没）である。サドラーは、イスラームの神秘思想家イブン・アラビー（1240年没）の存在一性論（この世のあらゆるものが神的なものの顕現であるとする思想）と、アリストテレス哲学の実体論を統合して、「実体運動論」を展開した。この結果サドラーは、古代ギリシャ哲学の“常識”では相容れない実体（アイデンティティー）と運動（変化）を1つに結びつけて議論し、神の意志に基づく一瞬一瞬の「変化」こそが、表面上は固定的に見える「実体」の本来の性質であると主張したのである。その際サドラーに大きなインスピレーションを与えたのは、神の意志によって一瞬のうちに天地が大変化するさまを示すクルアーンの「終末」の描写である。

以上のように理性知と伝承知の2つのベクトルの関係によって、1400年にわたるイスラームの歴史の中で、様々な思想潮流が生まれた。さらに現在ではスンニー世界の学者が、サドラーに言及するなど、スンニーとシーアの思想的・哲学的なコミュニケーションが進んでいる。この結果、これからも新たな伝承知と理性知の結びつきを示す思想潮流が現れて、様々な方向に揺れながらも展開していくであろうとの結論がなされた。

CISMOR特別研究員 中谷 直司

笹川平和財団・笹川中東イスラム基金共催 公開講演会

「中東有力メディアの現状とその影響力

—アル=アハラム新聞とアル=ジャジーラTV—」

日 時 : 2010年6月17日 (木) 14:00~16:00
 会 場 : 同志社大学 神学館3階 礼拝堂
 講 師 : Mohamed A. Shokeir
 (アル=ジャジーラ放送 番組編集者)
 Kamal Gaballa
 (アル=アハラム新聞 副編集長)



まず、アラブにおけるメディアの現状と、アル=アハラム新聞について、カマル・ガバラ氏が紹介をおこなった。現在のアラブ諸国においては、若者の人口がとて多くなっている。21歳以下の人口が50%を超える国もあるほどである。こうした人口構成は、メディアにとって大変重要であると言えよう。新しい世界観に対応しなければならず、しかも、新しいメディアへも対応しなければならない。アラブのメディアは、内容面でも技術面でも刷新の時期を迎え、それへの期待が高まっている。これまでは、アラブ世界の経済成長とともに、新聞やテレビといった従来のメディアも成長し、デジタルメディアも発展してきた。ただ現在は、世界的な経済危機の影響を受け、メディア産業の売上も低下してしまっている。危機前の状況に戻るのには、2011年頃になるだろうと見られている。

アラブ諸国のなかでも、アル=アハラム新聞の本拠地であるエジプトは、報道の自由の拡大によって、とりわけ活気を見せるようになった。2009年の時点で、新聞は180紙、雑誌は341誌が発行されている。テレビでは衛星放送も始まっており、アラブ全域に番組を発信することができるし、BBCの放送を受信することもできる。そしてテレビ局は、政治にかかわる主張や批判を活発に展開しており、議会や政党と並ぶ独自の「公」の役割を果たすようになった、と言えるだろう。

そうしたエジプトの数あるメディアの中でも、アル=アハラム新聞は最大の新聞社であり、1875年に創設された歴史ある新聞社でもある。創立以来から重視してきたのは「アラブの精神」である。当初は、アレキサンドリアで週刊紙として始まったが、1881年には日刊紙になり、現在の本社はカイロにうつった。今のところ地方紙を三つ、国際版をロンドン、フランクフルト、ニューヨークで発行し、週刊誌、月刊誌も手がけている。アラビア語版は、ドバイとクウェートで発行し、インターネット版も発信するようになった。

このように活況をみせているアラブのメディアであるが、いろいろな問題を抱えていることも間違いない。テレビの影響力は大きい、あまりニュース番組は見られていない。それに、アラブ諸国では「情報公開」を法律として定めている国がないので、情報不足が問題となっている。また今でも、ジャーナリストが自分の意見を言うと、場合によっては投獄されるという事態も起こっている。活字メディアの問題としては、読者の減少が挙げられよう。それに伴い、優秀な人材を確保するのが難しくなっているし、若手ジャーナリストの専門的な技術が育たなくなってしまう。このような現状の問題点を指摘して氏は、講演を終えた。

次にムハンマド・シュケイル氏が、アル=ジャジーラTVの紹介を行った。アル=ジャジーラTVは、1996年にカタール政府の支援を受けて設立された衛星テレビ局である。

アル=ジャジーラを一躍有名にしたのは、オサマ・ビンラーディンのメッセージ映像を独占的に放送したことであっ

た。つづいてイラク戦争では、アメリカが隠していたイラク市民の被害、あるいはアメリカ兵の捕虜が虐待され死亡している事実を報道したことによって、アメリカ政府と真っ向から対立するようになる。しかしアメリカ政府だけでなく、イラク政府とも対立することがあり、一時は、記者が国外退去を命じられる事態にもなった。つまり、アメリカ政府からもイラク政府からも嫌われていたわけで、これはアル=ジャジーラが、それだけしっかり仕事をしていたことの証だと言えよう。

アル=ジャジーラの信条は、「声を出せない人の声を伝える」ということ、そして「反対意見を平等に伝える」ということである。これらになるべく実現するために、粘り強い取材を心がけ、出来事背景について深くさぐろうとしている。その点、欧米のメディアは、不十分なのではないか。例えば、日本の報道でも「自爆テロ」という表現をよく聞くだろう。そういう報道を聞けば、それは恐ろしいテロリストの行動というふうにしかなえないかもしれない。しかし私たちは、彼らは何故そのような行動をしなければならなかったのか、という背景まで伝えたい。彼らは、アメリカやイスラエルの大型戦闘機によって爆弾を落とされ、土地を失い、家族を喪い、生きるよすがをなくした。彼らには戦うすべも限られているから、自爆テロに走ることになる。こういう背景を知ってほしい。もちろん、そうした報道をするからといって、私たちが自爆テロを起こした人たちに共感しているのではない。その行為は間違っていると思う。しかし、その行為の背景をさぐり、事実として伝える必要があるとも思う。そうした事実を報道して視聴者に判断材料を提供したいと考えている。

氏は、アル=ジャジーラが、政治的な意図ではなく、人道的な見地から報道を行っていることを強調した。こうしたアル=ジャジーラの信条は一見、価値の多様性を重視し、ヒューマニズムを掲げる欧米や日本の信条となんら異ならないように思われる。しかし、時おりユーモアを交えながらも真剣に、中東での出来事背景について深く説明する氏の熱弁は、欧米人や日本人の観点に、鋭く反省を迫るものであった。

CISMOR特別研究員 藤本 龍児

日本オリエント学会共催 公開講演会

「イスラエル北部のテル・エンゲヴ遺跡と

テル・レヘシュ遺跡の発掘調査」

日 時 : 2010年6月19日(土) 14:00~16:00
会 場 : 同志社大学 明德館1階 M1教室
講 師 : 山内 紀嗣(天理大学付属天理参考館 学芸員)

講師の山内先生は、日本考古学が専門だが、イスラエルの考古学調査でも貴重な発掘成果を上げてこられた。今回の講演会では、日本隊が本格的な発掘を行った3つの遺跡のうち、先生が参加されたテル・エンゲヴ遺跡とテル・レヘシュ遺跡の発掘成果を解説していただいた(もう1つはオリエント学会が1960年代に発掘を始めたテル・ゼロール遺跡だが、政治的事情で1974年に中断)。

両遺跡はともにイスラエルの北部、シリア、レバノンとの国境地帯に近いガリラヤ地方に位置する。ガリラヤには、イスラエル最大の淡水湖で、ヨルダン川が通じるガリラヤ湖が存在し、ヨルダン川を経てさらに南に下ると、死海に至る。また、地中海とアジアを結ぶ交通の要衝・イズレル平野にも近い。

ガリラヤ湖の東岸に位置するエンゲヴ遺跡は、紀元前10世紀の鉄器時代Ⅱ期からヘレニズム時代を経て、ローマ時代にいたる歴史を持つ。『旧約聖書』の「列王記」に記述がある「アフエク」とも言われるが、これまでは1961年のイスラエ



ル隊の試掘で概略が分かるのみであった。1990年に始まり、2004年に終了した日本隊の発掘調査で、その詳細が相当明らかになった（2009年には、慶應大学の調査隊が追加調査を行った）。

いわゆるテル（「遺跡丘」）だが、4～5メートルとあまり高くなく、大きさは南北約200メートル、東西120メートルである。日本隊による各層の発掘の結果、特に注目すべき遺構として、鉄器時代からは、ケースメトウォール（内部に土を詰めた二重式の城壁）と列柱式の建物跡（紀元前10世紀のものと、同8世紀のもの）が、またヘレニズム時代の層からも26部屋分の建物群が出土した。列柱式の建物の用途については、物資の集配場（エントリポット）と推定される。紀元前9世紀頃のキプロス系の土器も出土した。

鉄器時代以前の遺構が確認されなかったこと、また城壁と建物が計画的に南北方向に正確に合わせて建設されていることから、紀元前10世紀に人工的・政治的意図によって突然作られたと考えられる。このことを示すように、シリア方面（アラム王国）からの襲撃を最初に受ける東・北の隅部分からは、物見櫓（タワー）の跡と考えられる遺構が出土した。鉄器時代の上層はペルシャ時代だが、ピット（ゴミ捨て穴？）が出土しただけである。ヘレニズム時代は、同遺跡とゴラン高原の間にあったデカポリスの1つ、ヒッボスの港町であったと考えられる。

レヘシュ遺跡は、『旧約聖書』の十二部族の1つ、「イッサカル」の居住地とされるガリラヤ湖南西に位置している。2006～09年の5次にわたる日本隊の調査まで、土器などの表面採取を除くと、全くの未発掘であった。北にタボール山があり、タボール川とレヘシュ川に挟まれた南北350メートル、東西250メートルの小判形の自然地形の丘陵上にある遺跡である。イッサカルの町として『旧約聖書』に出てくる「アナハラト」と考えられてきたが、最近行われたアマルナ文書（エジプト出土の粘土板文書）の胎土分析によって、この主張がほぼ裏付けられた。遺跡の歴史は前期青銅器時代からローマ時代に至るが、最盛期は後期青銅器時代から鉄器時代の初め頃と考えられる。この時代の遺構として最も特徴的なのはオリーブの搾油施設と思われる円形遺構である。鉄器時代の末期の長方形型のものを含めて合計5基見つかっている。主な産業はオリーブ油の製造で、エジプトなどの都市との交易品だったと推定される（特に後期青銅器時代はエジプト支配時代で、エジプト由来と思われる出土物も発見）。また祭祀場と思われる遺構や、レバノン出土のものとよく似た特徴をもつ仮面、把手にナツメヤシをあしらったジャー（壺）などが出土した（すべて鉄器時代）。豊穡のシンボルであるナツメヤシは、『旧約聖書』の「生命の樹」につながった可能性がある。

ヘレニズム時代は遺構が確認されず、断絶がある。ローマ時代は少ししか発掘できなかったが、寒村だったと思われる。ユダヤ教の儀式に使う石製の計量カップや、小麦粉を引くための臼が出土した。その後、人の居住はなくなる。

講演中、山内先生は、発掘中に撮影された遺構や出土物の写真と、関連地図・資料などをスライドで多数紹介されて、古代イスラエルについての考古学上の最新の知見をととても分かりやすく説明された。

CISMOR特別研究員 中谷 直司

第1プロジェクト 研究会

“Contemporary Islam and the Question of Modernity”

日 時 : 2010年7月3日(土) 13:30～17:30
会 場 : 同志社大学 湊水館1階 会議室
講 師 : Farzin Vahdat (ヴァッサー大学 研究員)



現代のイスラーム世界の運動と何百万というムスリムの立場を理解するためには、イスラーム社会におけるイスラームと近代性の複雑な関係を学ぶ必要がある。近代化は様々な段階から成る複雑な現象である。ヨーロッパの近代化において極めて重要なのは、最初の段階である規律によって自立した個人が現れた宗教改革であった。ヴァフダット氏は、イスラーム世界は現在この重要な段階の真ただ中にあると考えていると述べた。氏は近刊の著作である*Islamic Ethos and the Specter of Modernity*において、八人のイスラーム思想家を取り上げ、このような重要な段階に直面するイスラーム世界のムスリムたちの近代世界に対する態度や感情を分析している。

西洋に限らず、どの社会においても、個人の自立と近代化には大きな関係があることは言うまでもない。人口の多くが力（agency）あるいは主観性（subjectivity）を獲得した場合にのみ、民主主義や人権といった概念が成立する社会が可能となるからである。こうした人間の力や主観性の考えは、イスラームにおいては、地上における神の後継者としての人間というカリフの概念に見られる。現代のイスラーム思想において、人間の力は主として代理的かつ間接的な作用という観点から概念化されている。

ヴァフダット氏が近刊の本で取り扱った思想家たちは、近代化への反応の土台としてこの「代理としての力」の概念を持ち出している。しかし、これらの思想家のほとんどが、この概念は神の至高性を否定する矛盾を秘めているという共通した見解を持っていた。したがって、ムスリムの新たな展望を構築する際、彼らは力を付与された新たなイスラーム的人間像を描くのだが、同時に近代化の主要な構成要素である人間の力を否定してしまうことになった。人間が力を持つようになることは、神の無力化を意味するからである。近代化に関するムスリムたちの意識を理解するためのこうした方法は、近代主義のムスリム思想家の抱える動揺と矛盾を明らかにするものである。

今回の研究会では、その思想家のなかからムハンマド・イクバル（Muhammad Iqbal, 1877-1938）サイード・クトゥブ（Sayyid Qutb, 1906-1966）を取り上げ、現代イスラーム世界と近代性に関する問題についての分析がなされた。イクバルの思想の中心にあったのは、彼がkhudiというペルシャ語で表そうとした人間の自我である。khudiという言葉によって、彼は人間の個の自立性の概念を構築しようとした。イクバルは、宗教的な基礎において人間は自由であると信じ、一貫して自由意志の概念を主張した。

イクバルは、近代西洋哲学をふまえたうえで、イスラームの再解釈を行おうとしていた。しかし、イクバルによるムスリムの自己の構築は、結果として「西洋」という他者の創造につながった。イクバルは西洋への批判とムスリムとの対比を通して、ムスリムの自己を構築していった。彼の政治的立場の基盤にあったのは、神でないものへの不服従という考えであった。人間が捕われた状態にあるのは宗教的あるいは世俗的権力に関わらず、地上の権力に服従しているからであり、人間は神への服従によってのみ解放されると、彼は信じていた。さらに、政治に関して、イクバルは人間の主観性と自由は神に由来するものであると信じていたことから、宗教と政治、正確には共同体の政治問題の分離を支持しなかった。しかし、彼は神の代わりに聖職者が統治する神権政治を支持することもなかった。

サイード・クトゥブは、エジプトだけでなくスンナ派さらには、シーア派においても最も影響力のあるイスラーム主義運動の思想家と考えられている。クトゥブは、独裁国家だけでなく自由民主主義による福祉国家や今では機能していない共産主義システムに取って代わるような新たなイスラーム的文明を創造しようとした。

イクバルと同様に、クトゥブもムスリムとしての自己を構築することが、近代世界の勢力に対抗する唯一の方法だと考えていた。神以外の者への服従から解放されることがイスラームの基盤にあるとクトゥブは考えていた。イクバルのように、神にのみ従う自己の意識を確立することで、人間の力を向上させることがクトゥブの思想の土台にあった。クトゥブは、こうした自己の強化は厳しい鍛錬によってのみ可能となると考えていた。しかし、この自己の強化は神の力に依存するものであった。ここにおいても、人間の力を強調しつつも、神の存在から人間の能力や意志には限界があるというクトゥブの思想の矛盾が見受けられる。

以上のように、イクバルとクトゥブは、イスラームの知識に基づいた人間の力と主観性の思想の形成に大きな役割を果たした。人間の主観性は近代世界の根幹として不可欠であり、イクバルとクトゥブの思想は今後ムスリム世界の近代性の形成に重要であったことが示されるかもしれない。

CISMORリサーチアシスタント 山下 壮起

第2プロジェクト 公開講演会 「イランの核開発疑惑と核不拡散体制」

日時：2010年7月31日（土） 13:00～15:00
会場：同志社大学 クラーク記念館2階 礼拝堂
講師：木村 修三（神戸大学 名誉教授）

木村氏の講演は、イランの核開発疑惑をめぐる諸動向を主要テーマとするものだった。02年の核開発疑惑発覚以前から、イランでは、アメリカ(王政時代)やロシア・中国(イラン革命後)の支援で核開発が行われていた。同国は70年の発足当初からNPTにも加盟している。だが02年8月、イランの在外反体制派が、イラン国内にIAEAに申告していない二つの核施設があることを暴露、イランが軍事目的の核開発を行っているのではないかと疑惑が浮上した。その後イラン政府も未申告施設の存在を認め、IAEAの査察受け入れに同意する。

査察の結果、ウラン濃縮実験をはじめとする活動を、イランが未申告で行っていたことが判明した。これを受けIAEA理事会は、03年9月、イランに核施設・活動の完全な透明性の確保と、ウラン濃縮・再処理関連活動の全面停止を求める決議を採択した。だがイランは、この決議がNPT加盟国に認められた核平和利用の権利を侵害するものとして強く反発。英仏独は事態を打開するため、イランと03年10月に「テヘラン合意」を結んだ(イランは平和目的の核開発活動の権利は有するが、ウラン濃縮・再処理関連活動は自発的に停止する。また追加議定書に署名しその批准手続きを進め、批准前の暫定適用にも同意する。核疑惑解消後、英仏独はイランに核を含む諸分野で経済・技術協力を行う、という内容)。もっともイランは、追加議定書への署名と暫定適用には同意したが、ウラン濃縮関連作業は事実上継続した。そこでIAEA理事会が4回にわたりイラン非難決議を採択したところ、イラン側は激しく反発し、緊張が高まったため、英仏独は再び調停に乗り出し、04年11月に「パリ合意」が成立する(イランは自発的な信頼醸成措置として核濃縮、再処理関連活動を停止する。その停止は相互に受容できる長期協定のための交渉が行われている間継続する。長期協定にはイランの核活動が平和目的であるという客観的保障、イランに対する経済・技術協力およびイランの安全保障に対するたしかな保障を含む、という内容)。

だがブッシュ政権の「悪の枢軸」発言への反発などから、イランでは保守派の影響力が増しており、05年6月に保守強硬派のアフマディネジャドが大統領に就任する。05年8月、英仏独がパリ合意に基づいた「長期協定」案をイランに提示すると、イラン側はその内容を不服として受け入れを拒み、核濃縮関連作業の再開と、追加議定書の暫定適用停止を決定、「パリ合意」は瓦解する。再度のIAEA理事会決議に反し、その後もイランが濃縮・再処理関連活動を継続し、追加議定書の適用も拒んだことから、06年3月にIAEA理事会は問題を国連安保理に付託した。安保理はIAEA理事会の決議事項を実施するようイランに求めたが、逆にイランは濃縮実験の成功を発表するなどの挑発的姿勢を鮮明にする。そこで安保理は06年7月、イランに濃縮・再処理活動を全面停止することを求め、従わない場合は制裁措置をとるとの決議を採択。その後もイランが濃縮活動を継続し、規模を次第に拡大していったことから、06年12月から08年9月までの間に、安保理はイランに対する制裁を4度にわたり決議した。

一方イランは09年夏、燃料切れが見込まれた軽水型研究炉の燃料確保のため、IAEAに協力を要請した。これを受けIAEAは、イラン保有の濃縮ウランを減らすため、イラン製低濃縮ウランをロシアで20%まで濃縮し、それをフランスが燃料棒に加工するとのスワップ案を提示した。しかしイランはこの案を最終的に拒否し、IAEA理事会の非難を押し切って国内での高濃縮活動を開始した。イランへの制裁強化を求める声が強まる中、イランはトルコ、ブラジルと共同で、イラン製低濃縮ウランをトルコに移送し、米、露、仏、IAEAが濃縮ウラン燃料棒をイランに供給するという内容の宣言を行った。イランにトルコ、ブラジルが同調した背景には、欧米に有利な現行のNPTの「二重基準」に対する非欧米加盟国の不満がある。

国連安保理は10年6月に新たなイランへの制裁を盛り込んだ決議を採択した。ただこの決議では制裁強化に消極的な中国やロシアに配慮し、エネルギー部門は制裁対象外とされた。一方従来アメリカが独自に制裁を行うことに批判的だったEUは、今回アメリカの意向に沿った制裁を実施することになった。この制裁には石油・ガス産業に対する新規支援の禁止、EU域内におけるイランの特定銀行の資産凍結と営業制限、イランの船舶・航空機のEU内への入域制限、イラン革命防衛隊関係者への査証発給禁止と資産凍結などが含まれ、実施されればイラン経済に大きな打撃を与える可能性がある。この制裁を牽制するためか、イランは濃縮ウランのスワップについて交渉を再開する用意がある旨、10年7月にIAEA事務局長に書簡で伝えたと発表している。



◆ 2010年度前半活動報告 ◆

一神教学際研究センター (CISMOR)主催

2010年5月8日 (土)

第2プロジェクト 公開講演会

「グローバル化とアメリカの覇権
—そして、日米関係のゆくえ—

講師：五十嵐 武士 (桜美林大学 教授)
会場：同志社大学 臨光館2階 R201教室

第2プロジェクト 第1回研究会

「グローバル化とアメリカの覇権
—そして、日米関係のゆくえ—

発表：五十嵐 武士 (桜美林大学 教授)
コメント：山口 昇 (防衛大学校 教授)
会場：同志社大学 溪水館1階 会議室

2010年5月15日 (土)

若手研究会シンポジウム

「マルティン・ブーバーの思想とその聖書解釈の可能性
—ドイツとユダヤの間で—

第1部 公開講演会

「マルティン・ブーバーの聖書解釈」

講師：木田 献一 (山梨英和大学 前学長)
会場：同志社大学 神学館3階 礼拝堂

第2部 研究会

「聖書学と法学の観点から」

発表：「聖書学におけるブーバー」
津田 一夫 (同志社大学 大学院)
「マルティン・ブーバーのTheokratie理解の特徴」
平岡 光太郎 (同志社大学 大学院)

コメント：北 博 (東北学院大学 教授)
濱 真一郎 (同志社大学 教授)

会場：同志社大学 寧静館5階 会議室

第3部 研究会

「哲学とユダヤ学の観点から」

—聖書解釈に見るブーバーの思想—
発表：「聖書における神の直接統治の思想的意義
—ブーバーの士師記解釈より—」
堀川 敏寛 (京都大学 非常勤講師)
「マルティン・ブーバーの聖書解釈における
声の形態学—JudaistikとGermanistikの交叉—」
小野 文生 (京都大学 特定助教)

コメント：合田 正人 (明治大学 教授)

会場：同志社大学 寧静館5階 会議室

2010年6月5日 (土)

第1プロジェクト 第1回研究会

「イスラームにおける理性 ('aql)と伝承 (naql)
—スンニー派とシーア派—

発表：鎌田 繁 (東京大学 教授)

コメント：中田 考 (同志社大学 教授)

会場：同志社大学 至誠館3階 会議室

2010年6月17日 (木)

笹川平和財団/笹川中東イスラム基金共催 公開講演会

「中東有力メディアの現状とその影響力
—アル=アハラム新聞とアル=ジャジーラTV—

講師：Mohamed A. Shokeir

(アル=ジャジーラ放送 番組編集者)

Kamal Gaballa

(アル=アハラム新聞 副編集長)

会場：同志社大学 神学館3階 礼拝堂

2010年6月19日 (土)

日本オリエント学会共催 公開講演会

「イスラエル北部のテル・エンゲヴ遺跡と
テル・レヘシュ遺跡の発掘調査」

講師：山内 紀嗣

(天理大学附属天理参考館 学芸員)

会場：同志社大学 明徳館1階 M1教室

2010年7月3日 (土)

第1プロジェクト 第2回研究会

「Contemporary Islam and the Question of Modernity」

発表：Farzin Vahdat (ヴァッサー大学 研究員)

コメント：嶋本 隆光 (大阪大学 教授)

会場：同志社大学 溪水館1階 会議室

2010年7月31日 (土)

第2プロジェクト 公開講演会

「イランの核開発疑惑と核不拡散体制」

講師：木村 修三 (神戸大学 名誉教授)

会場：同志社大学 クラーク記念館2階 礼拝堂

第2プロジェクト 第2回研究会

「イランの核開発疑惑と核不拡散体制」

発表：木村 修三 (神戸大学 名誉教授)

コメント：石川 卓 (防衛大学校 准教授)

会場：同志社大学 至誠館3階 会議室

2010年8月7日 (土)

第1プロジェクト 公開講演会

「レナード・バーンスタインとユダヤ教/
キリスト教関係：反ユダヤ主義との闘い」

講師：Hillel Levine (ボストン大学 教授/歴史学者)

会場：同志社大学 臨光館2階 R201教室

一神教学際研究センター (CISMOR)共催

第1プロジェクト 第3回研究会

「Memory and Reconciliation:

Jewish Attitudes towards conflicts and suffering」

発表：Hillel Levine（ボストン大学 教授/歴史学者）

コメント：市川 裕（東京大学 教授）

会場：同志社大学 溪水館1階 会議室

2010年4月24日（土）

同志社大学神学部・神学研究科主催 公開講演会

「スウェーデンボルグとその研究の意義」

講師：Jane Williams-Hogan（米国プリン・アシン・カレッジ・オブ・ザ・ニューチャーチ・カーペンター・チェアー 教授）

会場：同志社大学 神学館3階 礼拝堂

◆ 来訪者記録 ◆

年月日	氏名	所属機関・役職	国名
2010/8/7	Hillel Levine	ボストン大学 教授 / 歴史学者	アメリカ
2010/7/31	木村 修三	神戸大学 名誉教授	日本
2010/7/20	Sarah Bint Abdul Mohsin Bin Jalawi	President, Prince ABDUL MOHSIN Bin JALAWI CENTRE for RESEARCH & ISLAMIC STUDIES	サウジアラビア
	Mesfer Ali Mohammed Al-Qahtani	Associate Professor, King Fahd University of Petroleum & Minerals	サウジアラビア
2010/7/3	Farzin Vahdat	ヴァッサー大学 研究員	アメリカ
2010/6/19	山内 紀嗣	天理大学附属天理参考館 学芸員	日本
2010/6/17	Mohamed A. Shokeir	アル=ジャジーラ放送 番組編集者	カタール
	Kamal Gaballa	アル=アハラーム新聞 副編集長	エジプト
2010/5/15	木田 献一	山梨英和大学 前学長	日本
	勝村 弘也	神戸松蔭女子学院大学 教授	日本
	北 博	東北学院大学 教授	日本
	合田 正人	明治大学 教授	日本
	手島 勲矢	関西大学 非常勤講師	日本
2010/5/8	五十嵐 武士	桜美林大学 教授	日本
2010/3/13	村山 盛忠	日本キリスト教団 牧師	日本
2010/2/27	西尾 哲夫	国立民族学博物館 教授	日本

発行 同志社大学 一神教学際研究センター (CISMOR)

〒602-8580 京都市上京区今出川通烏丸東入

TEL 075-251-3972 FAX 075-251-3092

E-mail: info@cismor.jp

http://www.cismor.jp

編集 CISMOR事務局編集部

執筆協力 高田 太

印刷 中西印刷株式会社